
クローバー（２）

ディライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバー（2）

【Nコード】

N4267Z

【作者名】

デイルイト

【あらすじ】

あれから2ヶ月。奇妙な同居生活もすっかり落ち着いていた草野春樹と碧原一葉、二葉、三葉の4人。騒がしくも平穏な毎日を取り戻し、有意義な日々を送っていた春樹だったが、それは長くも続かないようである。クールなクラスメイト花咲嘉穂に惑わされたり、同居バレ恐怖のゲームパーティーに、二葉にまさかの求婚者が現れたり。・・・！相変わらず春樹の周りは忙しい。

ああ、俺の平穏な日々が……。日常ホーム&ラブコメディ、クローバーシリーズの第2弾！

Prologue (前書き)

どうも、デイライトと申します。クローバー(1)のつづきとして(2)をスタート致します。前回の小説を読んでいた方、本当にありがとうございます！(2)をクリックして頂けた方、完結済みである(1)の方から読んでいただけるとお話がわかります。今回も遅筆ながらのほんと書いて行きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

だいたい全10回を予定しており、1回が約7000字〜8000字くらいです。

こんな小説ですが、感想評価などいただけただけの日には、できもしないバク宙をやっちまうぐらい喜びます。

では、今回もよろしくお願い致します！

クローバー(2)スタートです！

Prologue

クローバー（2）

6月の初め。季節は春の色を消し落とすべく、長きにわたりじめじめとした雨を降り注がせる。

夏の訪れを感じさせ、傘が手放せなくなるこの頃、新しいクラスの面々にも違和感を感じなくなり、平和と怠惰を心から愛する俺、草く野春樹のはるきはようやく平穏という宝にありつけていた。

4月のあの出会いから、俺の生活は一変した。

俺の悩みでもあるにつつき栗色髪がたまたま学校一の御令嬢美少女、碧原一葉みどりばいっぺんの髪色と同じだったことで、俺は彼女とニアミスしてしまった。その事をきっかけに、なんの因果か一葉のアパートの火事現場に居合わせた俺は、一葉とその妹二葉と三葉を匿ったことで、俺達は辛くも同居生活をする事となった。

そのことで、色々問題もあった。

2ヶ月経った今でもこの事は内緒であるし、親しい友人に嘘をつき続けている罪悪感もある。同級生の男の家に居座ってるなんてのも大問題だ。でも俺は、俺の我が儘で、彼女達に残ってもらおう事にした。土下座までして。本当にどうかしていたと思う。平穏を愛する俺が、まさか自分から泥沼に足を踏み入れたんだから。でも、そんな泥沼で遊んで泥まみれになるのも悪くない。それは一葉と出会ってから身を以って知ったことだ。

ッ！！？

突如腹の辺りに感じる重みと痛み。

2ヶ月前の走馬灯がぐにやりと形を成さなくなる。

「ハルキハルキ！もう朝だぞ〜！」

重たい瞼を持ち上げて、腹の辺りで馬乗りでゆさゆさと俺を揺らすその姿に眼を凝らす。

「・・・ん、フタバか・・・」

薄い水玉模様のパジャマ姿に、空も飛べそうな寝癖のついた栗色シヨートカット。小学6年生にしては無邪気すぎるテンションに、整いすぎている顔の造形は妙に似つかわしいようにも感じる。

「もうご飯できてるよ〜！」

朝から直射日光のような笑顔を向けるのは碧原家次女ふたは二葉だ。首を傾げながら布団に収まる俺の上で横揺れする。

「・・・へ？なんで？」

あれ、今日は朝飯当番は俺のはずだし、というかなんで二葉が起こしに・・・。

俺ははっと気づいて、首だけ回して目覚まし時計に眼をやる。

その時計は無情にも3時23分を指したところで時計としての仕事を放棄して眠りについていた。

「うおおおお！？時計止まっとる!？」

「わぁ！」

俺が慌てて起き上がったために、俺に乗っかっていた二葉はころんと後転する。

「だいじょうぶ！ヒト八が作ってくれたから！」

「え、マジか!？」

側にあつた携帯で時間を確認する。学校には十分間に合う時間だ。こつこつという時のために少し早めに起きるようになっている。俺は一先ずホツと一息ついて布団から出る。しかし、一葉がいなかったら朝飯は抜きとなっていたことだろう。

「　　と」

俺は思い出したように、俺の隣で今だ眠り姫のように眠りつづけて

いる少女に目を移す。

「ミツバ、朝だぞー」

横向きで幸せそうに寢息を立てている彼女は碧原家三女三葉だ。みつば

「……………ん……………」

穏やかな表情から一転して、顔をくしゃつとさせて身体を起こす三葉。

「……………おはよ……………ハルキ」

三葉は囁くように静かに微笑む。起き上がると同時に薄い桃色のパジャマが見える。寝起きのため、今は背中越しまで流れる綺麗な栗色髪だが、普段は束ねて右肩に下げるサイドポニーテールにしている。姉に同じくして整いすぎている顔の造形に、小学4年生とは思えないほど落ちついてしている大人しい娘だ。

「おはよミツバ。ヒト八が飯作ってくれたみたいだから、着替えてこい」

「……………うん」

ゆっくりと布団から出ると隣の空き部屋を宛てがった碧原三姉妹の部屋へと引っ込んだ。

「もー！ミツバのヤツすぐハルキの布団に潜り込むんだ！」

二葉が腰に手をあてて頬を膨らませる。あの風の強かった夜を境に、三葉はよく俺の布団に潜り込んでくる。了解を得る場合もあれば、朝起きるといつの間にといつの間にもある。気付かず寝返りをうって押し潰してしまわないか懸念しているところだ。

「まあいいじゃんか。なんならフタバも一緒に寝るか？」

俺が何の気なしに問うと、二葉は俺の布団をちらりと見て、すぐに顔を赤く染めた。

「ね、ねないよ！これでももう6年生だし、来年は中学生になるんだぞ！そんな子供っぽいことできないよ〜だっ！」

べーっと舌を出した後、ついつとそっぽを向いて二葉も着替えるためか、三葉にあやかるように部屋へと消えていった。二葉の方がよほど子供っぽいぞと言ってやりたかったが、ぎりぎりのところで飲

み込んで苦笑した。

そんな二葉を見送って、俺も自分の支度へ取り掛かる。といつても布団を畳んで後は着替えるくらいしかないのである。俺はさっさとブレザーだけを抜いた制服姿に着替えて居間キッチン兼用スペースへと向かった。

「あ、ハルキ寝坊！」

部屋を出ると、ちょうど朝食のスクランブルエッグをテーブルに運んでいるエプロン姿の女子高生がいた。

「わ、わるい、目覚まし時計が止まっちゃまってさ……」

俺はぷらんと摘むように、寝坊の原因を作った犯人を見せ付ける。

「もう……私が起きなかつたら完全に遅刻だよ？」

お母さんのように口を尖らせて、俺を上目遣いで睨む。はつきり言えばまるで怖くないどころか俺の中の可愛い表情ランキングベスト3に入るだろう彼女の表情だ。ちなみにあと二つは……まあおいおい教えてやろう。

制服にエプロンという格好で頬を膨らませているのは、碧原家長女一葉だ。誰もが振り向く美貌を欲しいままにしている彼女は、俺と同じ学校に通う同級生。枝毛一つも見当たらないような腰辺りまで流れる綺麗な栗色ストレートヘア。何の汚れも知らないような瞳とその宝石を守るような長い睫毛。滑らかな曲線を描く鼻に、桃色の弾けるような、それでいて柔らかな唇。そして美人というだけに留まらせない、幼さも残すふわりとした輪郭に、女性の中でも小柄な体軀はそれをさらに際立たせる。しかし出るところはきつちり出ているといったように、これ以上を求めようのない総てを手に入れていた彼女こそ、碧原一葉その人である。しかし、それでも天は二物を与えないらしく、一葉は学校では近寄りがたい御令嬢という不名誉かつ理不尽なレッテルを今でも貼られている。まあ色々原因があるのだが、いまだ解決するに至ってはいない。俺達と友人として付き合うようになってからは、以前よりはだいぶ良くなったと思うが。そのため、学校での友人はあまりに少ないのだ。でもいざこれに

ついても俺が解決してあげたいと思ってるのだが、いかんせん俺も社交的な性格でないため、期待薄である。

「ほら、寝癖直して、はやく食べよ？」

「おう」

同居生活を始めて早2ヶ月が過ぎ、俺達のこの生活の中でもはや遠慮という2文字は完全に消え去ったと言ってもいい位まで落ち着いていた。あの時の選択はやはり間違っていなかったのだ。そのお陰で今の平穏な生活がある。そして俺はこの素晴らしい現状を大事にしていこう。そう心に決めたのだ。

ルキ ！クサノハルキ！

拡声器のような音量で俺の名を叫ぶ方角へと突っ伏していた顔をあげる。

「草野！お前はなんで朝のホームルームから爆睡状態に入っているんだ？」

視界の定まらない眼を凝らすと、白いタンクトップに青ジャージの体育会系マツチヨマン、我が2-D担任岩崎勲夫いわさきいさお（だが担当数学）教諭が、持っているチョークを今にもやり投げの如く投げ付けようとしているのが見える。

「・・・んあ、すんません・・・」

周りを見渡すと、見慣れたクラスメイト達のクスクスと笑う姿。俺の席は一番後ろの中央で、どうやらタツパのある岩崎教諭からは丸見えらしい。一番前の席では、列の人の横からひょっこりと顔を覗かせて笑いを堪えている一葉の姿もある。

岩崎教諭は、仕様がないなと言った感じに大きく溜め息をつくくと、すぐにホームルーム終了のチャイムが鳴り響いた。

「ハルつちゃん、今日は一段と眠そうじゃん？どつたの？」

チャイムと同時にクラスメートが掃けると、それと同時に腐れ縁、筑紫正志つくしまさしがチャラ男全開の笑顔でやってきた。筑紫は、俺よりさらに明るめの金髪に近い茶髪のトップを立たせて、片耳ピアスにおしゃれな黒縁メガネをかけている。そして首周りにはいつも欠かさず身につけている、6月ではそろそろ首もとが蒸れそうな長い紫色マフラーを巻いている。登下校時には特大のヘッドホンとスケボーを相棒にする真正正銘のチャラ男である。

「昨日夜中にな……」

俺は前の不在の席に座った興味津々な筑紫に、眠そうな眼を向け答えようと口を動かしたが途中で止めた。

「なにになに！？気がつくとな隣に美少女でもいたってか!？」

アホさ満載な発言をする筑紫だが、実はあながち間違いでもないため、俺は少々肩をびくつかせる。

時計で確認したときは1時半過ぎだっただろうか。三葉が俺の部屋の襖を開け、そのまま真っ直ぐに俺の布団内へと侵入を図ってきた。昨日はたまたまその時に起きていたせいもあって、三葉が気になつて完全に寝不足である。三葉は完全に寝ぼけていたらしく、俺の背後へ回ったと思ったら、何を勘違いしたか俺を抱き枕と認識したらしく、俺の背中にかなり長い時間腕を回していたのだった。

「アホか」

といつてもそんな事実を簡単に口に出せるわけもなく、親友の妄言は妄言のままうつつちやる。

そんな冷たい俺の言葉に、筑紫はまるで可愛くないうるうるとした瞳を向けるが、俺は気付いていないようにそっぽを向いた。するとその視線の先にもう一人の親友の姿があった。

見上げると、いらつとするほどの爽やか笑顔を振り撒いて、さくまけ佐久間

恵介がこちらにやってきた。

「ハルキ今日も眠そうだな」

アホな親友と発言レベルが同じな佐久間だが、その正体は学校の女子生徒のアイドル的存在。大人しく見せる黒髪無造作ヘアーだが、整った顔にどこぞの芸能人的愛想。学業優秀、スポーツ万能。もう描写するのも馬鹿馬鹿しくなるほどのイケメンのお手本である。

「お前ら俺を描写する時絶対に『このいつも眠そうな』から入るだろ」

「?なんの話だ?」

「何でもない。こつちの話だ」

いつもの眠そうな眼で筑紫と佐久間を睨む。

「ねね、ハルっちゃん!近々ハルっちゃん家に行っていていい?」

「はあ!?な、なんで・・・?」

急な筑紫の発言に思わず声の上擦る。閉じていた眼もついつい開く。

「だってさ、2年になってから全く行ってないじゃん?おばちゃんにも挨拶したいし、つかハルっちゃんちにあるWeeが面白すぎてちよくちよく通いたいくらいなんだよ!」

「ああ、あのテニスのか!面白いよなあれ」

佐久間も同調する筑紫の言うWeeとは感応型コントローラー対応のゲーム機である。そういえば押し入れにいれっぱなしですっかり忘れてたな。今度四人でやるう。二葉と三葉喜ぶぞきつと。

「というわけで、今度俺らを楽しませてくれ」

お前らは喜ばんでいい。

「ナニナニツ!?なんの話してるんだい??」

三人でだべっていると、話が聞こえたらしいクラスメイトにして一葉の唯一の親友である枝村葵が、跳ねるようなステップで俺の背後から顔を覗かせる。彼女はとにかく元気印。肩まで伸びる薄茶色の髪に前髪を留めるための青い髪留めがトレードマーク。大きな瞳に猫のような特徴的な口角。美人というよりも可愛いらしい仕草

の多い、明るく笑顔の眩しい女の子である。

「おはよアオイちゃん、Weeって知ってる？」

筑紫が後ろで俺の両肩に手をかけている葵に問い掛ける。

「おはよ筑紫くん！ゲームだよねっ！あのCMでやってるやつ！」

葵がスカートを翻しながら、見えないテニスラケットを振る。

「そそ、それが何故か一人暮らしのハルっちゃん家にあるんだよこれが！」

「マジかい！？そりやすごい！」

大袈裟に驚いて持っていた透明ラケットを放る葵。

「なんかの抽選で当たったんだよ」

筑紫め、余計なことを。この流れだときっと・・・。

「よし！じゃあ今度ハルキンちに皆で集まるか！」

佐久間が何かいいことでも思い付いたように立ち上がった提案する。サクマこら！お前サクマじゃなくてアクマだろ！？

どう考えても俺を陥れようとしているとしか思えないぞ。

「いやいやいやいや！無理だって！俺の部屋に8人も人が入るわけねえよ！」

「8？春樹と筑紫と俺と枝村と碧原と花咲で6人だろ？それぐらいなら大丈夫じゃないか？他にも誰か仲良いやつでも呼ぶのか？」

佐久間は指で数を数えながら首を傾げている。焦って口が滑った。

つい二葉と三葉がいる前提の話をしてしまった。というか呼ぶのかつてもううち来ることは確定かよ！？

「ちょ、待ってって！俺の部屋汚いし、女の子をそんな部屋に入れるわけにはいかねえだろ！？」

俺は半ば必死になって反論する。実際は綺麗好きな一葉が隅々まで掃除してくれているので足の踏み場もないなんてことはない。

「あたしはあんまり気にしないよ？」

「俺！俺が気にするの！」

気にするのは同居バレについてだが。

丁度俺が涙目で訴えている時に、天使の鐘が鳴った。1限開始のチ

ヤイムである。

おし！このままこの話はうやむやにしちまえば大丈夫だ！

「げ、授業だ・・・」

「うーん、残念」

「じゃあハルキ、来週までに部屋綺麗にしといてくれよ！」

「おう！まかせとけ・・・っではあ！？」

口々によろしくやらまかせたなど人の気も知らない無情な言葉を残して、各自自分の席へと戻っていった。

まずい。もう全く断る理由が無くなってしまった。実際一人暮らしのやつの家なんて友人にたむろしてくださいお願いしますって言っているようなもんだからな・・・。

しょうがない。次の英語の授業は俺のあまり思わしくない頭を存分に捻って代替案を考えることにする。

また面倒ごとが増えてしまった。

午前中の授業はうんうんと唸りながら必死に解決策を考えていたために、授業内容などは耳から耳を光速で通り過ぎてしまった。ただ先生方からは、考えている姿が勉強に意欲的であると見なされたらしく、何度か名指しで褒められてしまった。まさかこんな不純な考えに浸っていたとは口が裂けても言えない。

昼休みは2年になってからのお馴染みの面子、一葉、葵、花咲、筑紫、佐久間と昼食をとったのだが、ここでも佐久間が余計なことをしかしたために、来週の日曜日はハルキンちでWeeパーティーをするぞー的な流れにしゃがった。そのため、一葉から「大丈夫なの？」と「あとで話聞かせてもらうから」のありがたい目線を頂くこととなった。

そして昼食を終えてからは結局思い浮かばなかった解決策を、往生際悪く頭だけ机に載せて必死に考えている。

「日曜日楽しみね」

ハスキーな声で囁くように言っつて、俺の前の不在の席に腰を降ろしたのは花咲嘉穂だ。

クールで知的な表情で妖艶に微笑する彼女は、胸辺りまで伸ばす黒髪を毛先でカールさせてふわりとした印象を出させる。それでいて凛と主張させる眉と奥二重の瞳、すつと伸びる鼻に、小さな唇。少々Sっ気がありそうなその表情も相俟つて、まさしく美人といつても差し支えないだろう。スタイルもよく着物がよく似合いそうだ。

「全然楽しみじゃねえ」

俺は机に顎だけ付けて顔をあげながらむすつと答える。

「あら、何故？男の子3、女の子3。言っつてしまえば合コンよ？」

「・・・お前わかつて言っつてんだろ？」

「ふふ、何を？」

悪戯に笑っつてごまかす花咲。

そう。何故かは今だに知らないが、花咲は俺と一葉の関係について、何やら色々知っつていそうな節が多々あるのだ。

4月に一葉との同居生活問題を解決した。その時、一葉を助けるために花咲は俺にどうすべきかを気付かせてくれた。事情も知らないのに。その前のショッピングモールハナオカでばったり出会っつてしまった時もそうだ。いくら二葉と三葉を見たからと言っつても、同居がばれないよう気をつけると釘を打っつてきたことは気になっつていた。そして俺は問い掛けた。一度は交わされた質問をもう一度振っつたんだ。

『お前は俺と一葉のこと、どこまで知っつている？』

と。花咲は少し思案するようにな歩を進めた後、真っ直ぐ俺を突き刺

すよつな目線を俺に向けて、振り向きざまにこう言ったのだ。

『 知りたい？ 』

と。俺の答えはイエスだった。

しかし彼女は俺の求めている答えをくれなかった。

音も立てずに口角をあげ、そして、

『 そのうちわかるわ 』

と、最後は花咲に似合わない満面の笑みをくれたのだった。

「花咲・・・もう2ヶ月経つんだぞ。そろそろ教えてくれたって罰は当たらないんじゃないか？」

「もう2ヶ月も経つのに、相変わらずあなたは私を名前で読んでくれないわよね」

少し口を尖らしながら、毛先のカールを弄る花咲。

「じゃあ力ホって呼べばいいのか？」

「なんか私が強引に呼ばせてるみたいでヤね」

「実際呼ばせてるだろ」

花咲は座りながら足をぶらぶらさせている。

「なんか距離感じるじゃない。一葉も・・・葵ちゃんも名前
で呼んでるのに」

ふいにそっぽを向いてそう呟く花咲。巻き髪だけしか見えなくなり、
表情は何えない。

「ん〜、まあそうだなあ。でも慣れちゃったってのもあるからなあ」

「そうじゃないわ」

「ん？何が？」

花咲の発した言葉の意味がよくわからず聞き返してみるが、花咲は

首を横に振った。

「何でもない」

よいしょと零して、席を立つ。

「ふふ、日曜日あなたがどうでるのか、楽しみにしてるわ」
意味深に微笑んで、花咲は一葉と葵の元へと戻って行った。
やっぱりあいつ絶対に何か知ってるだろ・・・。

第1章

「どうしてこうなったの!？」

木曜日の放課後、いつもの買い出しから帰ってきてすぐに、緊急会議が開かれる。勿論内容は、日曜日に草野春樹宅に友人が遊びに来てしまうという、本当なら楽しみにしていたいい筈のイベントについてだ。

「いや、なんとというか流れで・・・」

「どんな流れよ、どんな!」

一葉がかなり困ったように頭を抱えながら、不用意な約束を取り付けてしまった正座で反省中の俺を睨む。

「気まづくなつて視線を逸らすと、二葉と三葉は夕方のアニメに食いついていて、我関せずを貫いているのが見える。」

「筑紫のアホが急に俺の持つてるWeeをやりたいとか吐かしやがったから・・・」

「筑紫クンのせいにしな・・・ってそういうえばハルキWee持ってたの?」

怒った表情から一転、はつとしたように驚きの眼を向ける。

「お・・・おう、前に雑誌の抽選に応募したら当たったんだ。コントローラーもちゃんと4つついてる」

「ホ、ホントに!?! わあゝ私一回やってみたかったんだよねゝあれ!」

頬に手を当てながら、見えないコントローラーを手に腕を振る一葉。喜ぶのも無理はない。このWeeという次世代ゲーム機は発売から半年が経つというのに、今だに手に入れるのが困難というほどの超人気ハードなのだ。一挙手一投足を覚えてしまうほどにCMを流している癖に、在庫切れの連続で「これはあるある詐欺だ」なんて言われているほどだ。

俺は立ち上がって、Weeが封印されているだろう押し入れを漁る。

「確かこの辺に・・・」

「あのWeeをこんな汚い押し入れに閉じ込めておくなんて・・・。ハルキは今全世界のゲーマーを敵にしているよ」

「んな大袈裟な・・・お、あつたあつた」

殆ど使っていない、パツケージの箱そのままにWeeは押し入れの奥で横たわっていた。確か以前1、2回筑紫と佐久間がうちに来てやったきりだな。

「ほとんど新品同様じゃない。こんな面白そうなのなんでプレイしないの？」

一葉が埃を被っていただけのほぼ新品Weeを見て零す。

「確かにこいつは時間も忘れるほど楽しい、今までにない画期的なゲームだ」

「ならなんで？」

「多人数ならな・・・。アパートの狭い一室、夕方一人で架空のテニスラケットを振っている俺の姿を想像してみろ」

俺に言われると、一葉は首を傾げて下唇に人差し指を添えながら考えるポーズ。3秒ほど思い浮かべた後、何かを察したように眉をひそめた。

「・・・そもそもハルキが運動してる姿を想像できない・・・」

「そこから!？」

完全に怠け者を見る眼だよねそれ!？まあ否定はしないけどさ!

「要するに、一人でやるゲームじゃねえってことだ」

「そっか。それで皆でうちにきてゲームする・・・ってどういうことよ!？」

一葉は本題を思い出したように眼を剥く。

「つまり・・・そういうことなんだよ」

「悟ったように言っなっ!」

腕を組み、斜めに構えて答える俺に、一葉が得意のチョップを喰らわせてくる。馬場さんも顔負けだよ。

「うーん、でもどうしよう……。皆で楽しくゲームもしたいし・・・かといって同居がバレるわけにも・・・」

一葉はWeeへの好奇心と同居バレの恐怖心とで板挟みになって悩んでいる。

「もうあいつらには言ってもいいんじゃないか？」

「ダメだつて。言ったら絶対にまた葵が心配するもん。ていうかだから前もこれで悩んだんじゃない」

「それもそうだな・・・」

二人大きく溜め息をついて、テーブルに頬杖をつく。一葉はボーッと考えているようで、視線は明らかにさつきから出しっぱなしのWeeに向かっている。二葉と三葉に眼をやると、いつの間にかぼかぼかと小突き合いを始めている。何やら好きなキャラクターで揉めているようだ。

もう何年も前からずっと一緒に住んでいたかのような安心感を感じながら、俺は一つ小さく息を吐いて、夕飯の支度をなるべく立ち上がった。

今日の夕食当番は俺だ。本来今日の朝食当番が俺だったのだが、目覚まし時計が突然の辞職の意を示しやがったために、急遽交代となった。

今晚は金目鯛の煮魚に、肉詰めオムレツで固めようと考えている。

金目鯛は刺身のままで旨いし、酒蒸し、粕漬にしても大変美味だ。通年脂がのっけていて、重宝してい

ピンポン

俺が調理しながら気持ち良く心の中で金目鯛の紹介をしていると、家のチャイムが鳴らされる。

「あ、はいはい！・・・悪いヒト八、ちょっと今手が離せなくて・・・。。。。代わりに出てくれ」

「うん、誰だろ」

「この時間なら、おばちゃんだな。またおすそ分け持ってきてくれたのかも」

おすそ分けと聞いた途端、アニメも終わってごろごろしていた二葉が敵を察知したプレリードック並の速さで顔を上げる。

「おすそわけ！！にくじゃがが！？なんたらごぼーか！？なんとかぜんにか！？」

今にもよだれが出そうな表情で、来客者に顔を出そうと玄関に向かう一葉の後についていく。その様子を呆れたように眺める三葉。もう何度も見た光景だ。

「はい、今でまーす」

その声をかけて一葉がドアを開いた。と、同時にごっつんと鈍い音がしたと思えばからんからんと均等な軽い音を奏で始めた。

「あ！あ~~~~！！！勿体ないぞ〜！？」

二葉がその様子を見てなのか何やら叫んでいる。

「あ、あ、あ、あ、し、し、し、しつれいしやしたああ！」

「ええ！？」

一葉の驚く声も余所に、こちらからは見えないが、どうやら来客者は口どもりながら謝り、と思えば走り去って行ったようで、どたとたと2階の廊下を音を立てて駆けていった。

ようやく手の空いた俺は、事件の起こった玄関先まで向かう。

「な、なんだ誰？」

「わかんないけど・・・学ラン着た男の子・・・」

一葉の証言を聞き、俺の中で嫌な予感が沸々と沸き上がってきた。

「そ、そいつが何しに・・・？」

「なんか筑前煮を持ってきてくれたんだけど、お皿ごと落としちゃって・・・ってまさか・・・？」

一葉も答えに辿りついたように口を開く。

そう、以前大屋のおばちゃんに一葉をこのアパートに住まわせてやってくれないかという旨を頼みにいった時に、ちよろっと話に出たおばちゃんの一人息子の雄太^{ゆった}である。

何故わかるのか、理由は簡単だ。今まさに玄関に横たわっている皿はおばちゃんがつちにおすそ分けを持ってきてくれるときのプラスチック皿と同じ。そしてそんなおすそ分けを持ってきてくれるのはおばちゃんしかいない。そのおばちゃんが来れず、代わりに派遣されたヤツが学ラン姿なら間違いなく雄太だろう。

それにしても、あの様子だとどうやらおばちゃんから話を聞いていなかったらしいな。もう2ヶ月も経つというのに。

「あゝあゝ俺達の靴にも飛び散ってるじゃねえか」

玄関という国に爆弾を投下していった雄太のせいで、靴という国民が多大な犠牲を払っている。こりゃ片付けが大変だ。

「きょうはもうなんとかぜんになしか!? がーん!」

二葉が人生の終わりを迎えたようにひざまずいて頭を抱えている。

「くっそ〜! あのハゲゆるさないぞ〜! わたしの大事ななんとかぜんにを〜!」

雄太はハゲてないし、大事なのに筑前煮の名前を言えていないし。

二葉が盟友の敵かたきを打つように立ち上がるうとすると、再びチャイムが鳴る。

多分おばちゃんに事情を聞いて再びおすそ分けを持ってきてくれたのだろう。

「・・・おい雄太〜。開いてるぞ〜」

俺が平坦に外の雄太を呼んでやると、申し訳なさそうに扉が開いた。
「・・・」

「久しぶりだな雄太。もう零すなよ」

どうやら再びおすそ分けを持ってきてくれたらしく、先ほどとは違う皿に入れて持っている。今度は陶器のようなので、落としたら大惨事だ。

雄太は今年から花岡中にあがった中学一年生。中一にしてはかなりの高身長であり、高校で中背の俺とほとんど変わらない。短髪のトップをワックスで下手に固めていて、頬にはかなりのニキビがある。着ている学ランをだらし無く開けており、どうやら中学に上がって

妙に色気づいたようだ。そして何よりもこいつは……、

「ハ、ハル兄……いつ結婚したんだよ!？」

「お前はおばちゃんから何を吹き込まれた!？」

おばちゃん!?!ちよつと最近本当に悪魔じみてるよね!?

「だって母ちゃんが『あの二人は夫婦みたいだよね〜うふふ〜』なんて言ってたんだよ!？」

何ゆつてはるんですかあのお方は!?!紛らわしすぎるよ!?!

母親も母親なら子も子だよ!

そうだよ、こいつはとんでもなくアホなヤツだったよ!

歳を重ねていない分、筑紫よりアホだと言えよう。

怒っていないかと一葉の表情を伺うと、やはり俯いて顔を真っ赤に染めている。

この類の話を持ち掛けられると、毎回こうなんだよな。

「ちよつとまで雄太!とりあえずあがつてけ!説明するから」

「ダメだよハル兄!そんな二人の愛の巢に上がってしまうなんて俺にはできない!」

ダメだ、話が通じねー!

雄太を家に引きずり込むまでに5分を要し、ようやくお茶を出すところまでこぎつけた。

「……ハル兄……。もう子供いるの……?」

「お前はそれはやとちりの性格をどうにかしろ!？」

二葉と三葉を交互に見ながら、驚きすぎて大声も出せないといった様子。一体どうすればあのおばちゃんのほほんとした遺伝子からこれが生成されちゃうのだろうか。

そんなことを考え大きく溜め息をつく。仕方がないので不思議そう

先ほどまで俯き聞いていた一葉も、あまりの仰天発言に言葉を発せずにはいられない。

「さつきからハル兄と話してても二葉さんの顔ばかり思い浮かぶんだ……。ハル兄の普通でつまらない顔になんてさつきから一瞬たりとも目がいかないよ」

雄太後で覚えとけよ。まあ普通つてところはいいんだが。

「……。それで、フタバとちよっくら話がしたいと？」

「できればたくさんしたいけど」

図々しいな。

「ど、どうするヒトハ？この手の話はフタバにはまだ早いんじゃないか？」

俺は一応姉妹の長である一葉に尋ねる。すると一葉は急にクスツと笑いながら答える。

「べ、別にいいんじゃない？話をするぐらい……。ふふ」

「でもなあ……。つてなぜ笑う？」
なにやらかなり可笑しそうに口元を押さえながら笑うのを堪えている。

「だ、だって……。ハルキの発言が頑固親父みたいなんだもん」

「う、うるさいな！ま、まあヒトハがいつて言っんならいいんじゃないか！？」

顔が赤くなるのがわかる。一葉は俺のこの言葉もツボに入ったようで腹を押さえて声にもならない笑いに満たされている。

もう一葉は無視して、一葉達の部屋で三葉と遊ばせていた二葉を呼びに向かう。

「おいフタバ、雄太のやつがおまえとお話したいってよ？」

「ゆうたつてだーれ？」

「ああ、さつき筑前煮持ってきてくれたやつだよ」

二葉は顔と名前が一致したようで、急に苦虫を噛んだような表情に変わる。

「あいつかー！オオヤのぜんにをめちゃくちゃにしたあいつかー！」

「そう、そのあいっだ」

いきなり好感度最悪な二葉は立ち上がり、右の拳を高々とあげて、
「はなしあいをよーきゅーするっ!」

と叫んだ。確かさっきのアニメの台詞だなそれ。

その様子を三葉が頬を染めながら見ている。

え、何三葉もやりたいのかこれ？

「よし!しゅっげ〜き!」

話し合いを要求しといて、ものの一秒で出撃宣言を出した二葉は、
勢いよく部屋から飛び出した。取り残された三葉と目が合う。三葉
も来るかと目で問うと、コクリと言葉なく頷いて、俺の手を取って
きた。最近は何をするにもべったりくっついてくる三葉である。

三葉の手を引きながら居間へ向かうと雄太と二葉がテーブルを挟ん
で正座で向かい合っている。そして将棋の対局時で言えば、一葉は
タイムキーパーの位置だ。雄太は額に汗を滲ませながらきよるきよ
ると目を泳がせ緊張した面持ち。二葉もまた険しい表情ながら、緊
張とは違い、何やら可愛い顔で口を尖らせながら睨んでいる。この
図だけ見れば蛇に睨まれた蛙の図。ただ蛇側があまりに可愛らしい
ので、この言葉は似合わない。そして真ん中で戦況を見つめている
一葉は、どうしていいかわからずに二人を交互に見ながらおろおろ
している。蚊帳の外である。

そんな途中参戦はしにくい状況ながらも、俺と三葉は一葉の向かい
に腰を下ろす。どうやらそれを皮切りに筑前煮と恋心を巡る正義と
悪の熱い戦いの火蓋が切って落とされたようだ!ってなんじゃそり
や。

「ふ、二葉さん!」

口火を切ったのは雄太だ。定まらなかつた目を二葉に向ける。

「なんじゃ!」

二葉も交戦の構えだ。腕を組みながらつんと上から覗き込むよう
に見る。よし、可愛いぞ二葉。

「あの・・・ご趣味は・・・?」

まるで初々しいお見合いのような質問で攻撃に出る雄太。緊張のし過ぎで照準が上手く定まっていけないようだ。

「食べることじゃ！なのに先ほどどなたかがわたしの前でぜんいを落としたようじゃが？」

どこぞの將軍のように話す二葉。鋭いカウンター攻撃を喰らった雄太は肩をびくつかせる。

「あ、あれはちよつとした事故ですね、二葉さんのためなら毎日でも作って持ってきたいと考えている所存であります！」

慌てて將軍に深々と頭を下げる雄太。どこでそんな言い回し覚えたんだよ。ていうか作ってるのはおばちゃんだよ。

「え！？毎日！？それはちよつと参っちゃうな〜」

自分の後頭部を撫でながら、夢のような提案に頬を綻ばせる二葉。

現在二葉の頭の上では筑前煮のソファアに座って高笑いをしている姿が浮かんでいる筈だ。

「そ、それですね……。二葉さんにこの場を借りて言いたいことがあります……」

どれでなのかはわからないが、雄太はここでリーサルウェポンを放つことに決めたようだ。雄太のこれでもかという程に赤い顔がそれを物語っている。それを感じてか、向かいの一葉もそんな雄太を期待の眼差しで見つめながら、ほんのり頬を赤く染める。隣の三葉の唾を飲み込む音が聞こえる。俺もなにやら緊張してきたぞ。

緊張を解すために俺は先ほど用意してあった冷えたお茶に手をつける。

「なんじゃ！」

「結婚を前提にお付き合いしてください……！」

俺は口に含んでいたお茶を盛大に吹き出した。雄太に。

「あ！？汚っ！なにすんのハル兄！？」

「いきなりすぎるだろ！？まだボーイミートガールして30分も経ってないよ!？」

思わず発音の悪い英語で表しちゃうほどに動揺したわ!？」

一葉も向かいでちょっと可笑そうに口元を押さえる。三葉は何故か頬を染めて固まっている。

「俺はてつきり友達になつてくれとかそんな感じかと思ってたよ・・・遊びに行くとかさ・・・」

ほらみる、あまりに突然すぎる告白に二葉は口をぽかーっと開けて呆然としているじゃないか。

「そ、そっか。えと、じゃあ二葉さん！俺と友達になつてください！」

雄太の言い直しにはつと気づいた二葉は、

「え〜・・・どうしようかな〜・・・」

と何やら満更でもなさそうに雄太から目を逸らしてもじもじしている。先ほどの將軍が嘘のようだ。というかこんなしおらしい二葉は大変貴重である。

「そうだ二葉さん！今週の土曜日、遊園地に行きましょう！！」

「え！？遊園地！？」

雄太の提案に二葉はまたも心を揺さぶられ、テーブルに手をついて身を乗り出す。

そして何故かちらりと俺を横目で見る。

「・・・行つてきたらいいんじゃないか？」

遊園地と聞いてあまりに嬉しそうな顔を見てしまったため、雄太と二人きりっていうのはあれだが、否定するのも憚られたため渋々了承してやる。

「・・・みんなも一緒にいい」

二葉が視線を落としたながら、口を尖らせる。

「・・・おし！じゃあ土曜日皆で行くか！」

「ほんと！？」

二葉がきらきらとした眼を向ける。

「それいいね！そのほうが雄太くんもフタバと友達になりやすいんじゃないかな」

一葉も胸の前で手を合わせて嬉しそうに笑う。

「……遊園地かあ……」

三葉も頬をばら色に塗って、頬を綻ばせる。

「雄太もそれでいいか？」

「もちろん！二葉さんと一緒ならたとえ火の中の中だよ！」

そりゃ俺らを火に例えてるのかい？

「やったあ！ゆうえんちだー！」

うさぎのようにと跳びはねて、満面の笑みを振り撒いている二葉。それからはっとして雄太に向き直る。

「おぬし！なかなかいいやつじゃー！！」

びしつと雄太を指さして、悪戯な表情を向ける二葉。雄太は二葉の人差し指から出される見えない光線で撃ち抜かれるように、後ろに倒れた。

そんな様子を皆一緒に笑いあった。夕飯の用意は捗らなかったが、これこそこの言葉で締めてもいいだろう。

「まあいいか」

俺は小さく一息ついてそう呟いた。

雄太はいい返事を貰い、意気揚々と去って行った。

「雄太くん、男らしかったね」

一葉が調理している俺の後ろから声をかける。

「あいつは何も考えてないだけだろ」

「でもしつかりフタバの心を掴んでいったよ？その辺り、どう思われますかお父さん？」

その言葉に、両手で頬杖をつきながら悪戯に笑っている。

「……別にどうも思わねえよ」

少し不機嫌に見せてやると、一葉独自の解釈でそれを受け取ったらしく、

「あれ？もしかして妬いてる？」

と更になやにやと口角を上げる。

「何にだよ」

「雄太くんはフタバをとられちゃいそうなこと？それとも私が雄太くんを男らしいって言ったこと？どっちだろ〜な〜」

一葉はこちらに近づいてきて、俺の心の中を覗き込むように見つめてくる。俺の心臓が驚いたように跳ねる。頬が熱を帯びたようになくなっていくのを感じる。

「・・・あれハルキ？なんか私たち重要な何かを忘れてない？」

「・・・へ？な、なんかあったっけ？」

顔を近づけていた一葉は、そのままの状態で唐突に思い出したように話を変える。思わず素っ頓狂な声が出てしまった。

「・・・まあいつか」

この時は日曜日のゲームパーティーのことなんてすっかり頭の中から抜け落ちていたのだった。

第1章 完

第2章

ドアの向こうに突然人が立っていたら、皆様ならどうするだろう。まあ大抵の人は驚いて後ろに後ずさるか、そのまま床に無様に尻餅をつくのかも知れない。そして、「びつくりしたなーもう！」などと笑い話で済むのだろう。

俺達は現在その状況にある。学校へ向かうため、俺と碧原三姉妹は意気揚々と、今日一日のスタートである扉を外側へと開いたのさ。そしたら、

「二葉さん、おはようございます。あなたの王子がお迎えにあがりましたよ」

一本の赤い薔薇を口に加えた、短髪学ランでおばちゃんの一人息子である自称王子こと雄太がかなり気色の悪いポーズをとりながら現れたのだ。

もうね、びつくりして腰抜かすとかじゃないよ。あまりの哀れさに俺は無表情のままに扉を閉めてしまったくらいだ。

「……………今誰かいなかった？」

俺の影に隠れてよく確認できなかった一葉が眉にしわを寄せながら問う。

「気のせいだ。たぶん、きつと…………いや、そうであってくれ……………」

俺が動揺を隠すように頭を掻くと、また勢いよくドアが開かれる。

「ちよつとちよつとハル兄！なんでドア閉めるのさあ…………つてあいた！薔薇の刺とげが唇に刺さった！」

顔を見せるなり抗議の構えを見せる雄太は、薔薇をくわえたまま口を動かしたために、薔薇からの洗礼を浴びている。

「…………雄太知ってるか？何故薔薇に刺があるか。それはお前みたいな自称バカ王子にくわえられないように進化してきたんだぞ」

「ちよ！？マジで！？進化つてすごいな！」

この通り皮肉も通じないバカ王子である。

「あー！おまえなんでまたいるんだ！？」

一葉のさらに後ろで、まだ靴を履いていた二葉が、雄太の姿を見つけて青汁を飲んだような顔を向ける。昨日でかなり慣れたのかと思っただが、そうでもないようだ。

「二葉さん！お迎えにあがりました！小学校までお送りいたしますよ！」

雄太はその場で片膝をついて、王子がお姫様に求婚するときのポーズで一礼。

「なにいつてんだ！ヒト八とハルキがついてくれてるからいらんないよ！」

二葉は本当に嫌そうな表情で、一葉の影に隠れている。

「お姉さん！二葉さんの送迎はわたくしめに！」

「だれがお姉さん！？」

一葉を早々にお姉さん呼ばわりして、キラキラとした汚れまくりの眼を向ける雄太。

「送迎だったって、そんなことやってたらおまえが遅刻するぞ」

「心配いらないよハル兄！俺は遅刻には慣れてるからね！それに、だから今日は早起きしてここで待ってたんじゃないか！」

グッドサインを自分の顔に向けて、先ほど刺が刺さって血が滲んでいる唇をにやけさせる。自慢するこっちゃないだろそれ。

「だからお願い！二葉さんと一緒に登校させてください！おねがいします！」

もはや王子など見る影もなく深々と土下座する雄太。好きな女の子と登校するのに土下座しなきゃならないなら俺は一生できなくていいとさえ思えてくる。

それほどまでに惨めである。いつの間にか口から落ちて床に転がっている薔薇が妙に哀愁を漂わせている。

「うっ……」

その哀れな様子を間近で見てしまった二葉は、心底嫌そうな顔なが

らも断れなくなり、やむを得ず首を小さく縦に振り、雄太と共に学校へと向かうことになった。俺達がちよつと後ろでついて来ることを条件に。まあ麓までは一緒だからな。

るんるん気分で鼻高々の雄太と、既に一日を終えて帰宅途中のサラリーマンのような表情の二葉を伴って下へと降りていく。5人も一斉にこのボロ階段に集結すると、今にも崩れそうな音を立てている。「ハルキ、この階段本当に大丈夫？」

5人分の重みに悲鳴をあげている階段を見て、一葉が心配そうな声をあげる。

「だ、大丈夫じゃないかな・・・」

一応そう答えておいたが、揺れが凄いいし音も豪快だ。そろそろ寿命だろこれ。

お年寄り階段には厳しい負荷をかけながら下へ降り立つと、おばちゃんがいいつも通り掃除をしていた。逆におばちゃんがいなかったら学校休んでも探しにいきそつだ。

「おばちゃんおはよ」

「おはようございまーす」

それぞれで挨拶をする。

「あらみんなおはよ〜。ごめんね〜昨日は雄太が迷惑かけたみたいで・・・」

おばちゃんは挨拶で一回、雄太の件で一回ずつ深々とお辞儀をする。「いやいや、そんなこと！」

あるけど。昨日靴と玄関の掃除が大変だったんだ。しかしそれは口に出さず、俺達は釣られるようにお辞儀を返す。

「母ちゃん！俺、二葉さんと結婚するから！」

思わず何も無いところで滑ってしまった。

「お前は見境なく妙な宣言をするんじゃない!？」

「お、おまえとケツコンなんかしないぞー！へんなこというな!」
二葉も俺に負けじとブーイングを送る。

「そうなの。がんばってね、雄太」

おばちゃんそれ、皮肉で言ってるんだよね？マジで応援してないよね？

おばちゃんは胸の前で手を合わせて、くしゃっと頬を緩ませている。

「任せとけ！それでは二葉さん、参りましょう！」

「うう・・・」

すっかり天狗になっている雄太の声に、本当に仕方なくと言った様子で小さい歩幅で隣に並ぶ二葉。一度言ってしまった事を律儀にも全うする姿はそれはそれで可愛いらしい。まあ雄太と共にってところが大変不憫であるが。

「じゃ、じゃあおばちゃん行ってくるよ」

「はい、いつてらっしやうい」

おばちゃんはマシユマロのような笑顔をくれて、俺と一葉と三葉も、後についていくことにする。

「ん？」

しかし、前に進むと足を出すと、これまでずっと手を繋いでいた三葉の足が動かない。よく見ると俯いてしまっている。

「どしたミツバ？腹でも痛いかな？」

「・・・ちがう・・・」

俺に手を取られながらも、水を切る子犬のように首を振る。

「どうしたのミツバ？具合悪いの？」

並んでいた一葉も急におかしくなった三葉に心配そうな眼差しを送る。

「・・・なんでもない・・・いこ・・・」

もう一度俯いたままふるふると首を振って答えた後、今度は自分から歩き出した。しばらくずっと、前だけを見て。

「こんにちは」

3限目の休み時間。例のごとく机に突っ伏そうと教科書共々机の下へ詰め込んでいると、そうはさせるかと言わんばかりに花咲が俺の前の不在の席に腰かけてきた。

「どーも」

俺はさも不機嫌を顔に出して花咲をすがめ眺める。

「あら、私じゃ不満？」

俺の顔を斜め下から覗き込むようにして、悪戯な笑みを送ってくる。

「む・・・別に」

何か照れ臭くなつてぶっきらぼうに答えてやる。毎度毎度ペースを崩されるのでかなり最近では苦手意識がある。あの件もあるしな。

「そう。あ、そういえば面白いこと知ってるのよ」

「面白いこと？」

さも今思い出したように言う花咲。思わずオウム返しで返してしまつたが、これはまた罠だな。俺を動揺させて面白がるつもりなんだこいつは。最近わかつてきたぞ。

俺はすばやく臨戦体制を整える。といつても頬杖をついて興味のなさそうな顔を向けてやるだけだが。

「土曜日遊園地に行くとか」

思わず顎が手の平から滑り落ちた。

「だからなんで俺のプライベートがモロバレしてんの!？」

「あら、私は一葉の話をしたのだけけど・・・」

ああ、一葉から聞いたのか。ってこれじゃ俺が行くこともわかつちやつたじゃん!何この誘導尋問!花咲は刑事にでもなればいい!

「あなたも一緒に行くの?じゃあデートなのね」

「ちがう。近所のアホガキと一葉の妹たちも一緒だ。まあどつちかつて言えば俺達は保護者変わりのようなものなんだよ」

花咲は胸元に下がる巻き髪を電話線を弄るように指に絡めながら、「ふーん・・・」と一言呟いて、上目遣いで覗くように眼を合わせ

てくる。

「それで、まだ行く遊園地が決まってないらしいじゃない？」

「あ、ああ。この近辺じゃ同じくらい距離で三つ遊園地があるからなあ」

「じゃあ、はいこれ」

そう言つて、花咲が差し出してきたのは5枚の紙切れだ。

「なんだこれ？」

「ネズミールスタジアムジャポンの招待券。あげるわ」

またピンポイントな枚数だな。そう突っ込みたかったが、どうせ無駄なのでそのまま飲み込んだ。

ネズミールスタジアムジャポン、通称NSJとはこの近辺、いや日本でも最大級に大きいアミューズメントパークで、大人から子供まで楽しめるアトラクション満載で大変評判がいい。土曜日の有力候補だったが、この近辺からだとは一番遠く、少し迷っていたのだ。

「お、おいおい、いいのかよこんなの貰っちゃっても・・・？」

「いいのよ、知り合いから貰って使い道がなかったから。五人用じやクラスメイトを誘うのにも中途半端だしね」

花咲はさらに招待券を俺の前に押し出してきたので、俺は素直にそれを受け取った。

「サンキューな。この借りは何かで返すからよ」

「あら、楽しみにしてるわ」

妖艶に微笑んで、花咲は席を立った。

午後の授業に起こる睡魔にも耐えて、ようやく待ちに待った放課後だ。俺は久しぶりに筑紫と佐久間を引き連れて町のファミレスへと向かった。最近は放課後になれば早々に一葉とスーパールに行くなん

てのが普通であり、朝の登校時も出発時間を早くしてしまつたために、こいつらと顔を突き合わせる機会があまりなかった。しかし、昨日は事前に今日の分の買い出しも済ませておいたし、二葉と三葉については朝方二葉を雄太が学校へ送つていった後、メールで雄太がおばちゃんちで一緒に夕飯を食べてもらうことになったなど吐かしていた。まあ二葉と少しでも仲良くなりたいために半ば強引に誘いこんだのだろうが。三葉もいつも二葉と一緒に帰ってくるのでおばちゃんのところでは厄介になるはずだ。なので、一葉も女子連中とどこへやら遊びにいってしまったらしいし、俺も久々にアホなこいつらとつるむことにした。

「いやあ〜！3人でこういうとこでだべるのいつぶりだ！？あ、店員さん注文注文〜！」

筑紫が黒縁メガネのレンズの奥でキラキラと眼を輝かせている。筑紫に呼ばれ、小走りで店員さんがやってきた。

「えっと〜、ドリンクバー3つと、俺はこのジャイアントパフェで！ハルっちゃんとサクマは？なんか食う？」

「俺は大丈夫だ」

「俺もいらん。夕飯前でよくそんなもん腹にいれておけるな・・・」
メニューに書いてあるパフェは見ていただけで胃もたれしそうなほどに甘つたるい色を醸し出している。また量が大ジョッキほどに大きくえぐい。

「こんなもん俺の第2の胃に放り込んでおけばなんてことないぜ！あ、じゃあ今言ったのだけで〜」

お前は牛か。店員さんはメニューを今一度読み上げ確認してから、ペこりと一礼して掃けていった。

「よし！じゃあやるかあ！いつもの！」

筑紫が景気よく右腕をあげる。

「またかよ・・・あれ飲めたもんじゃねえんだよなあ」

いつものとは、俺達がファミレスへ来ると決まっていられるジャン

ケンゲームだ。1 抜けは王様気分、2 抜けは3人分の飲み物を汲んでくる召使、そしてビリは死あるのみのタバスコ入りジュースの刑要するに囚人の気分を味わうのだ。

「負けなければいいんだよハルキ」

簡単に言うな簡単に。佐久間は背中越しに神々しいオーラを出しながら微笑んでくる。このゲームをすると決まって佐久間は王様の座に君臨する。今だ負けなしの強運の持ち主だ。なんでこいつにだけは天は二物も三物も与えるんだろうなあおい。

「悪いが今日こそは勝たせてもらうぞサクマよ！俺には秘策がある！」

筑紫が気張って立ち上がると、両手を裏にして合わせ、それをくると回してから自分の片目の前まで持つてきて、手と手の間から中を覗き込む。・・・まさかそれが秘策か？

「むむ！むむむむむむ！・・・見えた！！！」

ガバツと両手を離れたと思うと、そのまま右腕を大きく振りかぶる。「じゃあああんけえええん」

スローモーションに見える・・・というか実際にスローモーションで声を張る筑紫を見て、俺も佐久間も仕方なくといった感じに手を用意。

「ぼおおおおおんんしゃあああああああ！?!?!？」

筑紫パー。俺と佐久間はチヨキだ。

「のおおおおお！？じつちゃん秘策は嘘だったのかあああああ！？」消え去る間際のラスボスみたいな断末魔を出して、筑紫は頭を抱えながらテーブルに平伏した。じいちゃんに教えてもらったらしい秘策はものの数秒の戦いであっさりと敗れ去った。っていうかパーだした時の手の平にちっちゃくボールペンでパーって書いてあったよ。うな気がするが勿論言わないでおく。

筑紫が悶えている間に佐久間とも勝負をつける。まあ結果は言わずもがなだが。

「よし筑紫、どんな飲み物にタバスコを入れてほしい？」

王座についた佐久間様が腕を組みながら囚人筑紫に問うてやる。

「お、王の仰せの通り……に……に……」

今だ痙攣したようにテーブルに突っ伏している筑紫は、絶命直前の兵士のように答える。

「よろしい。では召使、メロンソーダにタバスコだ」

「ラジャー」

「ラジャーじゃない!? それ最悪ペアじゃん!」

ようやく息を吹き返したように起き上がる筑紫。

「ああ、俺はコーヒー頼む。ホットで」

「ラジャー」

「ちょ!? 本気!? あれ殺傷力激高だよ!」

筑紫が王様に懇願していたがあえなく要望は取下げられ、筑紫はどつやらパフェとタバスコ入りメロンソーダという最悪コンビを平らげねばならなくなった。

「げー、まじい……パフェの味をも凌駕するこの殺傷力……」

ようやくパフェも到着し、筑紫はパフェとタバスコメロンソーダを交互に口にしながらげっそりしている。

「言い出しっぺが負けるってのはよくあることさ」

佐久間がハードボイルドにコーヒーを手に勝者の余裕を見せる。

「うえーだめだ! ちよつと休憩だ!」

椅子に深く座り込んで腹をさすっている筑紫。

「おっとそうだ! それよりさ!」

と、思えば思い出したようにテーブルに身を乗り出す。

「2人は誰狙いなわけ?」

「何の話だ?」

いきなり訳のわからないことを言い出す筑紫を、頬杖をつきながらすがめ眺める。

「惚けるなよ! 今までの学校生活、なんだかんだ女っ気のなかっ

た俺らだが！今回は上玉が3人もいるじゃんか！」

筑紫がやらしい雑魚のヤンキーみたいな言い回しでまたアホなことを言い出す。

「ま、サクマは一葉ちゃん狙いだろ？こりゃ見ててもわかるもんな？」

「そそそそんなことななないぞ！おおお俺はただ仲良く学校生活をだなあ……」

急に頬を染め、物凄い勢いで動揺している佐久間。

「まあまあ、サクマについてはもうだいたいわかってっからいいんだよ。問題はハルっちゃん！君だよ！」

佐久間は腹をさすりながらも立ち上がり、俺をびしっと指さしてくる。

「なんで俺が……」

「ええい！はつきりしやがれ！ハルっちゃんは一葉ちゃんと嘉穂ちゃんのとつちを狙っているのだ！？」

「一葉ならまだしもなんで花咲も入ってくるんだよ！？」

「よく授業が終わると二人で内緒話してるじゃねえか！と思えば帰りは一葉ちゃんと一緒に帰っちゃまうし！」

もしかしてクラス内でもそう見えちまつてるってことか？

「まあ確かにそうだなあ。……碧原と花咲と、本当に何もないのか？」

佐久間も珍しく真剣な眼差しで俺に問い掛ける。……まあ当然だよな、好きな女の子が違う男といつも登下校してるっていうんだから。

「ああ。何もないよ本当に。登下校は家族ぐるみでの付き合いがあるからだし、花咲とはよく相談に乗ってもらってるだけだ」

少し佐久間に同情して、俺が気軽にそう言っていると、佐久間はほっとしたように肩を緩めた。

「マジかよハルっちゃん。俺はてっきり二股かけてるのかと思ってたぜ」

「俺にそんなプレイボーイ的甲斐性があるように見えるか？」

「見えないな」

二人で答えていい。結構シヨックだぞ。

「ふーん、そうか・・・」

佐久間は安心したのか、残り少なくなったコーヒーを一気に飲み干す。

そして、

「じゃあ碧原のこと、本気になっていいんだな？」

何かを決心したような鋭い視線で、俺に向かってそう言い放った。しばし時が止まったように感じる。周りの騒がしい喧騒も耳には入らない。ちらつと視線を動かすと、筑紫も面食らった表情で佐久間を見ている。

俺も驚いた。普段からあまり感情を表に出さない、少し何考えているのかわからないやつだったから、この宣言には驚きを隠せない。

「・・・」

答えようと口を開く。しかし何か喉でつかえたように声が出ない。喉が渴いているのか。俺は自分で注いできたコーラをストロークで吸い上げる。炭酸が上手く刺激になった。

「あ、ああ。いいんじゃないか！？そうそう実は俺も気付いてたんだよ！佐久間は一葉に気があるってさ！！」

俺は声高々に言い放った。その瞬間、俺に向けてくれた一葉の笑顔が頭に浮かんだ。どくと一つ心臓が跳ねる。

「そ、そうなのか！？なぜだ！？」

「お前意外と顔に出てるんだよ！だってほら、アホな筑紫にもばれてるくらいだよー！」

「アホいうな！？」

喋れば喋るほど、一葉の表情が浮かんでは消える。言葉と一緒に吐き出しているように。

「おおお！恥ずかしいぞー！」

佐久間は両手で顔を覆い、真っ赤になった顔を隠そうとしているが、

隠しきれない。

「が、頑張れよー佐久間！応援してっからさ！」

一葉は家族だ。そんな感情はない。ない筈だ。一緒に住んでいるんだ。そんな感情持つてはならない。

そうか、驚きなんかじゃないのか。隠せてないのは動揺だ。

いつか佐久間が一葉を連れて行ってしまおうんじゃないかって。

4月に俺は一葉に家にいて欲しいと言った。一葉も残りたいと言ってくれた。

でも、一葉自身がそう決めるなら、俺は背中を押すしかないのだ。家族とはきつとそういうことだから。そういうことなんだ。

「サクマの爆弾発言にはびっくりしたが、ちなみにおれは葵ちゃんだなあ！」

筑紫は腕を組み、うんうんと頷きながら、聞いてもないことを口走る。

「枝村のどこが気に入ったんだ？」

「なんつつかさあゝ！あの町で見つけた可愛い女のコー！みたいな無邪気さがいいよね〜！」

よくわからん例えだな。まあ筑紫と葵は性格的には似てるけど。

「そうかー。頑張れよー」

「ちよ、興味なさすぎじゃない!？」

俺は大層無関心といった眠そうな表情を向けてやった。

でも筑紫には悪いけど本当にこの時ばかりは無関心だったのだ。

さっきの佐久間の言葉と、一葉の笑顔で頭がいつぱいだったから。

Break

金曜日。

学校から帰ってくるなり、俺達は年末でもないのに大掃除を始めた。いや、大掃除というよりは改装工事と言ったほうが正しいだろうか。何故いきなりそんな事を始めなければならないのか。

それは

「日曜日のゲームパーティーについてだが、ヒト八たちにはあいつらと同様、客として来てもらう」

「お客？」

一葉たちとの同居生活を隠すために、俺があまり思わしくない頭を懸命に捻り出して考えたアイデアはこうだ。

筑紫達同様に、一葉にも客としてきてもらう。その際、Weeの噂を聞き付けた二葉と三葉は無理を言ってお姉さんについて来てしまったという設定だ。そうすれば自然な形で全員が俺の部屋に居られるという算段である。

そこで、現在の改装だ。すっかり碧原調になった部屋を万が一にも見つからないための措置を施す。幸い一葉達の部屋へは俺の部屋を通らなければ行けない。そこは襖ふすまで隔てられており、そこにタンスやら勉強机やらを移動すれば、裏の襖はただの押し入れにしか見えないというわけだ。

ついでに、俺の部屋へも入れないようにするためにテレビやタンスを俺の部屋への入口である襖の前に移動してやる。これで以前この部屋を訪れたことのある筑紫や佐久間がこの部屋について言及してきても、使用していないの一言で済むわけだ。

「よぉ〜し、これで一安心だな！部屋へ入るのにちよつと狭いけど」最後のテレビを運び終えて、大きく息を吐き出しながら豊に腰を降ろす。

流石にタンスなどは一人じゃ厳しい。老人でもないのに腰が断末魔をあげている。

「今お茶入れるね」

一葉が作業終了と見るや、甲斐甲斐しくキッチンへ動き出す。一葉たちには家具の移動を手伝わせてはいない。流石に一人じゃ無理なんて言ったらダサすぎるからな。

「土曜日はゆーえんち！日曜日はゲーム！たのしみだな〜！」

二葉が座布団に正座で座り、テーブルに両手で頬杖をつきながら、楽しみなイベントに想いを寄せている。夕方のアニメのオープニングテーマを決して音程が合っているとは言えない声で気分よく口ずさんでいる。

そして三葉は……、

「……あれ？何探してるんだ？」

何やらランドセルの中身を全て出して店を開いている。そして困った表情でノートや教科書の一つ一つを拾いながらをばさばさと振っていた。

「……ない……宿題のプリント……」

「学校に忘れたのか？」

コクリと一つ頷いて、落ち込んだ風に瞳を伏せる。

備え付けの時計に目をやると、現在4時半。学校が閉まっていなければまだ間に合う時間帯だ。

「ミツバ、俺が自転車におまえ乗せて取りに行くか？」

俺がそう提案してやると、三葉は笑顔という花を咲かせる。そして今度は2回縦に大きく首を振った。

「よっしゃ、じゃあひとつ走りするか！」

止めてある自転車の荷台に三葉を乗せて、俺もサドルに跨がる。それと同時に三葉は短い腕を俺の腰に回してくる。

「しっかり捕まってるよ〜!」

俺は自転車のストッパーを思い切りよく蹴って、自転車を走らせ始める。久々の仕事でマイチャリも柔軟体操をする老人のようにギシギシと音を鳴らす。

「……ふわ……」

そろそろスピードも出てきて、髪の毛が風に煽られる。後ろの三葉から驚きのような感嘆のような声も聞こえてくる。そろそろ下り坂に差し掛かる。ここからはペダルを漕がずとも一気に駆け降りる。坂道にならって体重が前にかかり始めると、三葉の腰に回す手は一層力が増す。

「ミツバいくぞ〜!」

「わあ!」

徐々にスピードがついてきて、周りの木々が残像で版画のような刷った絵のように見える。俺はこの景色が大好きなのだ。そして緑の匂いを感じながら風を切る様は、さながら森にできた自然のジエットコースターだ。ものの10秒程の短い距離ではあるが、この瞬間だけは全てのことを忘れさせてくれる。

勢いよく坂道と森林を駆け抜けて、俺は一度T字路で自転車を止めた。流石にここは猛スピードでは曲がれないからな。

「わあ、すごかったぁ……」

三葉が後ろで大きく息を一つ吐いて、嬉しそうな顔を覗かせる。

「すごいだろ?歩くのとはまた違った感動があるんだ」

普段あまり見ることのできない、三葉の満面の笑みがそこにあった。それだけで自転車に乗せてあげた甲斐があったというものだ。

俺は三葉の笑顔を引き出した嬉しさに浸りながら、再びペダルに足を乗せた。

ここからは、普段ならば右に曲がる。高校があり、ショッピングモ

ールや南田、住宅街などと栄えている駅前の方だ。しかし今回は左にハンドルを切る。花岡小学校は、さらに郊外の方へと向かう。もはや畑やたんぼ、そして農家のぼつぼつとした一軒家ぐらいしか見れなくなる。最近ではようやく駅前が栄えてきたが、まだまだこの辺りは田舎だ。ただ、自然が変わらず残り続けている点は、変化を嫌う俺にとつては喜ばしいことである。長く育ってきた場所が変わっていく様はあまり見たくない。

そんなことを考えながら、長閑なたんぼと畑の間を少し自転車を走らせて、俺と三葉は花岡小学校へと降り立った。どうやらまだ閉まってないようだ。

「懐かしいなあ〜」

幼少の頃の郷愁が胸を躍る。すぐに学校の全景が記憶から呼び起こされる。校門を抜けてすぐに校庭にでる。そこには、かなり大きなジャングルジム、シーソーや滑り台、鉄棒にブランコなどなど、小学生には必須アイテムである懐かしい遊具があつた。変わらない様でそこにあつた。

次に校舎を見る。

「・・・あれ？」

木造建築の校舎全体には、マス目のように組まれた鉄パイプに、工事中のシートが取り付けられていた。

「・・・改築工事、するんだって・・・夏に・・・」

「そう・・・なのか・・・」

きつと都会的な校舎に様変わりしていくのだろう。コンクリ仕様か、ガラス張りか。でも、生徒が綺麗で落ち着いて勉強できる環境ができるのはいいことだ。前はゴキブリだらけだし、黒板やらロッカーやらボロボロでてんやわんやだったからな。

でも、変わっていくんだ。そのうちこの辺りの森林や畑も住宅街になつてしまふのだろうか。

「・・・ミツバ、学校楽しいか？」

気を取り直して俺がそう問うと、三葉はすぐに俯いてしまった。

「友達・・・あんまないのか？」

俺が再びそう問うと、三葉はアヒルのように口を尖らせて、コクリと一つ頷いた。

「・・・なんて・・・話かければいいのか、わからなくて・・・」

薄れるような声で悲痛な想いを吐露する三葉。手を胸の前でぎゅつと握り、辛い想いを押し潰している。そういえば、前に一葉が三葉も人見知りだつて言つてたっけ。

話題選択に自爆した俺は、なんて声をかけていいかわからず、頬をかきながら意味もなく視線をさ迷わせる。

一つ大きな風が、俺達の髪を靡かせた。

すると、砂場のほうで遊んでいる一人の少年を俺の目が捉えた。滑り台のすぐ下だ。さつき見た時は気づかなかつたのだろうか。

「よし、ミツバ。あそこで遊んでる男の子に声かけてみよう！ちよつど同い年くらいだろ」

「・・・え？」

俺がそう提案してやると、三葉も俺が指す方を見てすぐに目を逸らした。

「大丈夫だつて！いつも二葉と話してるように、寄つて行けばいいのさ」

「・・・でも・・・」

俺はぐいぐいと背中を押して、少年の元へと運んでやる。

「ほら、さつき坂道で俺に見せてくれたばつちり笑顔で手振つてみる？」

上目遣いで半ば涙目な眼をこちらに向ける。少しばかり躊躇した後、仕方なくと言つた感じで少年の方に向き直り手を振ってみる。先程よりはぎこちないが、三葉は控えめな笑みを作つてゆつくり手を振つた。

そんな様子に少年は気付いたようで、そちらもにこりと笑みをくれ、手を振り返してきた。

「よし、寄っていつてみようぜ」

「う、うん……」

俺達はその少年がいる滑り台の下の砂場へと寄って行く。遊んでいるわけではなく、ただレンガで仕切られた砂場の中央でしゃがんでいるだけだ。

「ほら三葉、あいさつ」

俺の後ろで顔だけ覗かせている三葉に促すと、怖ず怖ずと前に出てきて、

「……こ、こんにちは……」

とだけ言った。もう夕方だしこんばんはだとは思うが、今はそんな事は問題ではない。三葉が多くない勇気を振り絞っているんだから。

「こんにちは」

少年は立ち上がり、まだ声変わりの済まされていない子供らしい声でお行儀よくぺこりと頭を下げる。

彼は、茶色いキャスケットを被り、同じく茶色いパーカー、下はジーンズを履いている。襟足やサイドから見える黒髪は艶やかであり、目鼻立ちの整った可愛らしい少年だ。彼が頭をあげると同時に、撫でるような風が俺達を撫^{なぐ}った。

「ミツバ。自己紹介してみ？」

後押しするように背中に触れてやる。一瞬びくつと身体を震わせて、三葉は意を決したように一歩前に出る。

「……あ、あの……碧原……三葉です……4年2組……です」

今にも顔から火が出そうなくらいに顔を真っ赤にしている三葉。こりや重度の人見知りだな。といっても一葉も確かこんな感じだったけど。

その様子を見ていた少年は驚いたような顔を向け、立ち尽くしている。かと思えばにつこりと静かに微笑んで、

「風間希望^{かまのぞむ}です。のぞむは漢字で『希望』って書きます。えっと……僕も4年生です」

と返してくれた。

その言葉に安心したのか、三葉はようやく俯いていた顔を上げて、少年の顔を眺めた。

「三葉ちゃん……って呼んでもいい？」

「……う、うん」

「僕の事も、のぞむって呼んでね」

「……う、うん」

何やら微笑ましい様子に笑みが零れずにはいられない。ちゃんと友達で来たじゃないか三葉。

「……おなじ4年生だけど、クラスにいない……よね……」

「別クラスか」

確かこの小学校は2クラスしかない。ということは三葉は2組だから彼は1組だろう。

「三葉ちゃん、僕いつも休み時間は砂場で遊んでるから、遊びにきてね」

希望くんは口角だけあげて、三葉に笑いかける。三葉はコクリと嬉しそうに頷いて、すぐに向き直って俺に笑顔をくれた。

「良かったなミツバ」

俺が三葉の頭を撫でてやると、擦ったそうに眼を細めた。

「……そうだ……ハルキ、プリントとってくるね」

「おう、そうだった。ここで待つてるよ」

踵を返して、三葉は決して速くない足を学校に向けて行った。それはさながらスキップのように跳ねるステップで。

「三葉ちゃんの……お兄さんですか？」

三葉を眼で見送っていると、後ろから丁寧な声がかかる。

「ん、まあそんなとこだ。俺は春樹っていうんだ」

「春樹さんですか。……ありがとうございます」

希望くんは再び深く一礼する。大変しっかりした少年である。俺が4年生の時なんか鼻垂れたクソガキだったぞ。

「そんな畏まらないでいいよ。こっちがお礼をいたいくらいだ。いきなり話かけてごめんな。そして、三葉と友達になってくれてありがとう」

真摯に俺が言うと、希望くんは「いえいえ！」と慌てたように両手を胸の前で振る。そして、少し落ち込んだように視線を落として、「僕、友達いないんです。みんな僕のことなんて無視するし・・・」そう呟いた。

意外だな。礼儀正しいし愛想も良くて、気立ての優しい少年であるように見えるのに。希望くんは続ける。

「だから、手を振ってもらえて、声をかけてもらった時はすごく、すごくうれしかったんです！」

先程まで振っていた手は次第に胸の前で小さなグーの手に変わり、嬉しさを表すポーズへと変わる。

「そっか。あいつも人見知り激しくて、あんまり友達がいなかったから、良ければ仲良くしてあげてくれ」

「はい、こちらこそ喜んで！」

閑静な笑顔で言って、またまた深々とお辞儀をした。

「ああ、そっか。ミツバはちょっとぴりからかってあげるくらいが丁度いいと思うぞ」

「そっなんですか？」

「おう。怒りだすと可愛いんだあいつは」

俺は笑いを堪えるように喉を鳴らす。

「怒っているのに可愛い・・・」

希望くんは顎に指で触れながらふむふむと頷いている。

「あはは。ありがとうございます。春樹さん」

「こちらこそ。お、帰ってきた」

足音に反射して振り向くと、とことことカルガモの子のような拙い足取りで三葉がこちらにやってくる。手には一枚の紙を大事そうに胸の前で持っている。どうやら見つかったようだ。

「・・・ハルキ、あった」

「おう、よかった。んじゃ帰るか」

俺がそう言つと、三葉はコクリと一つ頷いて、プリントを持っていない方の手で俺の手を握る。

「じゃあ希望くん。俺達は帰るけど、君は？」

途中まで一緒に帰れるのではと考えて聞いてみるが、

「いえ、僕はまだ少しここにいます」

と言つてまた砂場に座り込んだ。もうカラスも帰宅の途につくころなのに。三葉は少し残念そうに瞳を伏せている。

「そっか」

「はい。三葉ちゃん、」

「・・・は、はい！」

急に会話の矛先が自分に向けられて驚く三葉。

「またね」

少し間を置いてから優しく手を振り、満面の笑みで希望くんはそう言った。三葉はまた大きな光を宿したように表情が明るくなって、先程坂道で見せた笑顔で手を振り返していた。

その夜。

いつもなら寝ぼけて俺の布団に入ってくる三葉は、最初から一緒に寝たいと言い出した。二葉は頬をお餅のように膨らませて、気に入らない様子だったが、一葉と一緒に寝てあげてと言つので断るわけにはいかなかったが。まあ最初から断る気もないが。

「んじゃ、電気消すぞー」

「・・・うん」

天井から垂れ下がる線を1回2回と下に降ろして、部屋内を暗闇にしてやる。

布団から出ていた腕を仕舞って、右隣の三葉を気にしながら仰向けになる。

明日は遊園地か。遊園地なんて一体いつ以来だろうか。5人とかよく考えてみれば遊園地に行くにはかなり微妙な人数だよな。雄太が無駄なんだ雄太が。

などと後頭部で手を組ながらそんなことを考えていると、俺のシャツが弱い力で引つ張られた。

「……ん？どしたミツバ？」

顔だけ横の三葉に向けると、三葉はすでに身体ごと俺の方へ向いていた。

「……ハルキ、今日ね……ありがと……」

暗い中でもわかった。ほんのりと頬を赤く染めながら、三葉はとても心安らぐ笑顔を俺にくれたのだ。いつも控えめで感情を表に出すことがほとんどないあの三葉が、嘘偽りのないそのままの三葉を俺にくれた。やべえ、ちよつと泣きそうかも。

「ば、ばか、俺達もう家族なんだから、助け合うのは当たり前前だから？」

俺が照れ隠しにそう言うと、三葉ははつとしたような表情をしてから、俺に背を向けてしまう。

「ミツバ？」

「……なんでもない」

すすすと鼻を嚼る音と、その音とともに肩が反射しているのを見ると、すぐにわかってしまう。俺はあえて何も言わなかった。三葉が何故泣いているのか。本当の所はわからない。ただ、三葉はまだ子供なのだ。俺が簡単に触れてもいいことじゃないのはわかっているが、彼女達の両親は一体何をしているんだろう。一抹の苛立ちが俺の胸を侵食する。こんなにも健気で純心な彼女達を置いて……。

俺は考えるのをやめた。

思い出したくもないことを思い出しそうで、苛立ちはピークに達し
そうだったから。

せっかく三葉が可愛いプレゼントをくれたのにな。

「おしミツバ、明日は待ちに待った遊園地だぞ」

「・・・うん」

今だ嗚咽を漏らしていた三葉だが、返事だけはしてくれた。

「何乗りたい？あそこには面白そうなアトラクションがたくさんあ
るんだ」

三葉は思案しているのか、少し間を置いてから再びこちらへ向き直
る。

「・・・・・・観覧車」

少し晴れ上がった目に光を宿し、俺のシャツの袖を掴む。

「観覧車かあ。誰と乗りたい？」

また少し間を置くように、三葉も仰向けへと体制を変える。

「・・・ヒト八と、フタバと、ハルキと・・・4人で・・・」

「はは、それじゃあ雄太には下で寂しく待っててもらおうか」

「・・・・・・そう・・・する」

そう言ったきり、三葉から声を聞くことはなかった。替わりに聞こ
えてくるのは、安心しきったように眠る三葉の寝息だけ。暗闇の中
で、俺は目を細めて三葉の表情を見る。そして三葉の規則的な寝息
を子守唄に、俺もいつの間にか夢の世界へと誘こだまわれていた。

第3章 (1)

来たる土曜日。天気は梅雨の嫌な空気を吹き飛ばすほどの快晴。といつてもまだまだ辺りは明るいとは言えない。

それもそのはず腕時計を確認すると現在6時半。俺、一葉、二葉、三葉、雄太の5人は眠い眼を懸命に開きながら、花岡駅のホームで電車を待っていた。

「うゝ眠いよ・・・」

二葉がホームのベンチでごしごしと眼を擦って顔をしかめている。三葉は隣で俺の手を握りながら、舟を漕いでいる。一葉も二葉の隣で催眠術にかかったような表情で遠くの方を見ている。

何故こんな時間に駅にいるのかというと、朝の5時にピンポン連打で起こされて、誰だやかましいと戸を開けてみれば、またも雄太は薔薇を^{くわ}啣えながら、

「二葉さん、白馬の王子が遊園地へお連れしましょう」
などとニキビ面に似合わなすぎる台詞を吐きやがった。

馬がどこにあるんだ馬が。
安眠を遮られたことと、朝から不快な物を見せられたことでぶん殴つてやるうかと思つたほどだ。

今日俺達が行くネズミーサルスタジアムジャポン《NSJ》は花岡駅から電車一本で1時間ほど。調べたところ、開園時間は9時半からなので、今から行つても2時間ほどエントランスの前で待たされるのは確実だ。

「おい雄太、こんな早く行つても開いてないだろ」

俺は侮蔑の視線をくれてやると、雄太は眉を上げて外人のように肩を竦める。腹立つなその顔。

「ハル兄、わかってないね」

「なにが？」

「NSJだよ？早い時間からエントランスで並んで、早々に人気アトラクションに乗る！これは常識でしょ！」

「一体どこの常識なんだ。まあどうせ行くなら全てのアトラクションに乗りたいたいけど。」

「ってハル兄と話してる場合じゃないんだよ！二葉さーん！！」

相変わらず忙しい雄太は、眼をこしこしホームのベンチに腰掛けている二葉の元へと飛んでいった。おぼちゃんの子供とは到底思えない行動力だな。

4人を順に見ていく。

一葉の服装は、細かい構造の薄茶のワンピースに膝下のスカート部分分が白で二重構造になっている感じのもの。頭には斜めにちよこつと乗せた白いふわふわの帽子飾りが栗色の髪によく映える。全体的に見てふわふわな印象の彼女は、童話に出てくるヒロインのようだ。二葉は、黒の可愛いらしいプリントTシャツに赤いチエックのシャツを羽織っている。下はデニムショートパンツに黒タイツで、全体的にカジュアルな印象。

三葉は身体のラインが見える薄いピンクのシャツ、膝くらいの青いスカートに、腰に巻いた太めの茶色いベルトが特徴的なガーリー系ファッション。

ちなみにもあまり描写したくはないが、雄太は黒のシャツに赤のネルシャツ、下ジーンズ。

俺は黒のパーカーに同じくジーンズとかなり軽い印象の服装だ。

この三姉妹の前にはどんなに着飾ろうと敵いやしいので、もう開き直ってハナオカで安売りしてた売れ残り商品でのコーデイナーだ。笑いたきや笑え。

そんなことを考えていると、鼻声なアナウンスの後に電車が滑り込んでくる。始発近くの駅のため、まだまだ電車内は空いている。一葉たちをボックス席に座らせて、俺と雄太はその前で立つことにした。

一葉たちも夢の国への体力を温存するべく寝入ってしまい、俺と雄

太も壁にもたれ掛かりながらうつうつとしていた。たまに腕時計を確認していたが、30分も経つ頃になると、電車内は何やら通勤・通学ラッシュなのか混雑してきた。でも今日は土曜日だぞ……？よく辺りを見回すと、中高生や家族連れが多い。聞こえてくる会話の内容は何乗るだとかあのパレードがどうか……。

「……ま、まさかな」

そのまさかだった。

電車は駅に停止することに続々と人を補充していく。

車内は騒がしくなっていたことで一葉達も眼を覚ました。

「わっ！なにこれ！？」

ぎゅぎゅぎゅ詰めで立つのも困難になっている俺と雄太を見て、一葉が眼を剥く。

「ど、どうやらこれ全部NSJに行くっばいぞ……っついてててて！」

壁に寄り掛かっていたために人の圧力がもろに伝わってくる。

「ハル兄！あと2駅だよ！もうちよいだ！勝利は目前だよ！」

「なんの勝利だなんの！ってうおおお！また人が入ってくる！」

「ついたああああ！ネズミーサルスタジアムジャポン！」

ネズミーサルスタジアムジャポン前駅という駅に降り立ち、改札を出ると誘うような軽快な音楽が聞こえてくる。パークへのエントランスに続く鮮やかな色で彩られた鉄橋を歩いて行けば、そこは夢の世界への入口だ。

二葉はいの一番に鉄橋を踏み締めて、両手を天に挙げながら感慨に浸っている。

「っ、疲れ果てた……」

ウォーミングアップのし過ぎのように、俺と雄太は膝に手をつきげんなり。本番前から疲れ果ててしまった。

ちなみに先程まで乗っていた莫大な数の人々はほとんどここで降り立った。それでも駅も通路も広いため、身体が触れるほどの混雑ではない。

「うおおお！はやくいこーダッシュでいこー！」

ぶんぶんとして手を振りながら今にも盗んだバイクで走り出しそうな表情を向ける二葉。

「二人ともはやく〜！」

一葉も次いでいつもよりも遥かに高いテンションで二葉にあやかり手を振る。声を出さないまでも三葉も大きく手を振って、楽しさを身体いっぱい表している。

遠くに見えるパークの背の高い西洋風の建物をバツクに溢れんばかりの笑顔振り撒いている三姉妹は、遊園地の着ぐるみでもないのに周りの視線を独り占めだ。

「ハル兄……。いつもこんな風景を見てるの……？」

先程まで満員電車でぐったりしていた雄太も、神秘的な絵に口をおんぐり開けて見とれている。

「汚れるからあまり見るなよ」

「ナチュラルにひどいよハル兄！」

大袈裟に突っ込んでくる雄太は無視して俺は一葉たちのもとへと駆けていった。

「おおおなんだこれ!？」

鉄橋を越えると、日本にいないとは思えない景観と色とりどりの花たちが俺達を迎え入れてくれた。しかし驚いたのはそこではない。エントランス付近の広場では、既に入場待ちの人々でごった返しになっていたのだ。

入場口には既に前売券などを持っている組の行列があるし、チケットを販売する窓口にも大多数の人々が、あまり定まっていけない列を作って、窓口が開くのを心待ちにしている。

「……こ、これってまだ開園2時間前だよね……？」

一葉があまりの人の多さに目を点にして呆然としている。入場口に

列ぶ先頭付近に目をやれば、キャンプ用の小さい折り畳みの椅子に座りながら待っている人、レジャーシートを敷いてまるでピクニック気分で待っている人など、ちよつとプロフェッショナルなグループも存在していた。きつと各々どうしても乗っておきたいアトラクションがあるのだろう。もはや俺達とは気合いが違う。

「し、しょうがないから列ぶならつきやないな・・・」
もう最初から溜息しか出ない。夢の国への道のりはなかなか険しいようだ。

「あれ、列動き出した？」

もうそろそろ足が怠くなってきたという頃、列は思い出したように前に進み出す。ここから見える噴水の中央に伸びる時計を確認すると、どうやら開園時間を過ぎたらしい。

「おおお！ついか！」

「待ったね〜」

一葉と二葉が嬉々と安堵が入り混じったように笑いあふ。

「・・・って、なんか走ってねえ？」

前の様子が気になって覗き込むと、数人の制服を着た女子高生グループが、入場口のお姉さんの元気ないってらっしやいを合図にするように、切られたチケットを貰うと同時に猛然とダッシュをしていた。

「ハル兄、あれが例の真っ先に乗りたいアトラクションに向かう戦いの合図なんだよ」

雄太が屈伸運動をしながらやかましい横顔を向ける。夢の国で戦いとか言うんじゃないよ、物騒な。

「へえ〜みんな必死なんだな〜」

「ハル兄！なにのんきに人事みたいにいつてんの！」

「は？」

雄太は鬱陶しく眼を見開く。そして靴紐をきつく結んで、

「俺達も行くしかないっしょ、頂いただきにさ」

と意味のわからない事を吐かし、不揃いな歯を見せつけグッドサインを向けた。

・・・おー、そろそろ俺達も入場かー。

「二葉さん、是が否でもお乗りになりたいアトラクションはなんですか？」

「へ？んつとんつと、ジェットコースター！あのCMでやってるやつ！」

俺達の先頭に並んでいた雄太は係員のお姉さんにチケットを渡す。

「なるほど、スプラッシュバーレーですか。流石二葉さん、お目が高い。かしこまりました」

雄太のチケットが切られ、係員の人とその切られたチケットを返す。「では、いつてらっしゅい！」

元気な係員の挨拶を合図に、陸上のクラウチングスタートをかまして全速力で走り去って行った。ドップラーで「二葉さん！」と残して。

「・・・・・・・・・・あ、チケットお願いしまーす」

俺は他人の振りを決め込むことにして、平静を装って残り4人分のチケットを渡す。流石に一葉達も後ろで苦笑していた。

間もなくチケットがまとめて切られて、係員の「いつてらっしゅい！」で走り出す事もなく、俺達はゆっくりとゲートを潜った。

「・・・・・・・・・・わあ！」

三葉の感嘆の声が聞こえる。

足を踏み入れたその場所は、四方八方に広がるメルヘンチックな外観と音楽。ここだけ虹色で描かれた絵のように綺麗な風景。まるで別世界に迷い込んでしまったような錯覚。妖精が居ても不思議ではない華やかなその情景は、全ての人々の心にタップダンスを踊らせる。

エントランス付近にあった広場をさらに大きくしたような、心安らぐ場所に俺達は誘われた。

「きゃああ！すごいすごいすごい！！」

一葉のテンションも最高潮に達し、身体を動かさずにはいられない。「おおおお！すごいきれい！なんだここは！？」

二葉も眼に星を流して満面の笑みだ。

「あそこ見てハルキ！なんかいるよ〜！」

「おお、あれは・・・」

一葉が指す先には人の壁に囲まれた着ぐるみの姿。

「ネズミーサルのマスコットキャラクターのウツキーだな」

そいつは人だかりの中心でコミカルなダンスを交えながら、握手や写真に応じている。

外見は明らかに猿だが、身体の色は黒色。赤いオーバーオールを着て、足には大きい茶色い靴。高い声で「はははー」とよく笑う。その癖このキャラクターはネズミですとCMでも 書くほどの強引さ。これが猿じゃなかったらネズミに失礼である。

「・・・かわいい・・・」

三葉がふやつと頬を緩ませる。女性には大人気であるというウツキーは三葉の眼にも可愛く映るようだ。俺としては三葉の方がよほどマスコットに相応しいと思うのだが。

「ねね！みんな写真撮って貰おうよ！」

「おおお写真！とろうとろう！」

「ちよつと混んでるけど記念にはもってこいだな」

4人で顔を見合わせて、俺達はまずウツキーと写真を撮ることにした。カメラは先程駅でインスタントカメラを買ってきた。

5分ほど他の人達のピースサインを眺めてから、程なくして俺達の番が回ってくる。

「よ、よろしくおねがいします・・・」

何故だかウツキーに深々とお辞儀している一葉。そんなところでも

人見知りするのか。そんな一葉にウツキーもきびきびした動きでお辞儀仕返している。

俺は撮影係を担っているスタッフのお姉さんにインスタントカメラを渡し、俺もウツキーの元へと近寄る。

「…………お、おお結構でけえな…………」

意外に高身長なウツキーは俺達4人を上から覆うように肩を組んで、満面の笑みのまま表情の変わらない顔をこちらに向ける。な、なんか顔が変わらないから近くで見ると不気味だな…………。夢に出てきそうだ…………。

俺の左肩にウツキーの左手、一葉の右肩にウツキーの右手。その真ん中に二葉と三葉という図で撮影を開始する。

「はいはい！笑って笑って〜！」

スタッフのお姉さんの甲高い声が響く。お姉さんが片手で手を振りながら満面の笑みで俺達の笑顔を引き出そうとする。それにつられるように俺達も顔の筋肉を緩ませる。テレビとかでもよく見るけど、遊園地のスタッフさんは笑顔を引き出すのが上手すぎるだろ。普段無愛想の俺でも穏やかになる。

「はあ〜い、チーズ!!!」

パシャツという軽い音とともにまばゆい光が眼に焼き付く。

そしてお前たちは用済みだと言わんばかりにウツキーは大袈裟に手を振る。俺もお姉さんからカメラを受け取り、後ろが詰まっているから早く行っちゃめえ的な「いつてらっしや〜い」をもらって、俺達は早々にウツキーの輪から追い出された。

「遊園地って結構忙しないな」

「そうだね〜。…………でも、4人で初めての写真だよこれって…………」

ちらりと窺うように俺を見る一葉。

「えへへ、嬉しいなあ」

「俺も現像が楽しみだよ」

「うん!!」

広場の花たちにも負けられないほどの笑顔を咲かせて、頬を染める一葉。一葉達はきつと満面の笑みで写ってるだろう。じゃあ果たして無愛想な俺はどうだろう。写真はどちらかと言えば苦手な方だ。それでも俺は、今回だけは自信があった。スタッフのお姉さんの効力じゃない。ただ純粹に、心からの笑顔で写っているはずだと。

エントランス広場を通り、ギフトショップが建ち並ぶストリートへと足を運ぶ。ヨーロッパのような信号機や停車してあるレトロな自動車がかかり雰囲気醸し出している。この辺りに来ると、メイクや変装をしてキャラクターになりきっている人が多くなってきた。もはや日本にいるとは思えなくなってきた。そんな中、ほのかに香りだすメルヘンチックな甘い臭いを感じながら、俺達はのんびりとストリートのコンクリートを歩く。まだ開園して30分も経っていないというのにお土産コーナーは大混雑だ。そしてどれも目移りしそうな可愛いショップに、やはり一葉たちの眼はその都度さ迷う。

「みてみて！ウッキーの耳！」

売り物であるウッキーの耳を模ったカチューシャを付けて、一葉が笑いかけてくる。

「むっ・・・可愛いな」

「でしょ〜！」

俺としてはあまり可愛いとは思えないウッキーのパーツだが、一葉が身につければ何でも可愛い。もうさつきから歩く度にこの三姉妹は注目されているしな。擦れ違う人は必ず振り返るし、その後俺を見て、「なんだあの馬の骨は」みたいな眼を向けられる。くそう、やっぱり俺もビシッと決めてくれれば良かったかな。

「っつと」

そんなことを考えていると、俺のパーカーの裾が引つ張られる。

「……………ハルキこれ……………」

渡されたのはフリーパスチケットを入れておける首から下げるキャラクターストラップ。下からチワワのような瞳で訴えてくるのは三葉だ。

「……………皆で付けるか？」

「うんつける！……………あ……………つきたい……………かも」

ぱあっと笑みを零して、すぐに恥ずかしくなったのか呟き声になっ
てしまう。最近三葉の言わんとしている事がわかってきてちよつと
優越感だ。たまに少し素が出てしまう所も可愛い。って俺三葉好き
すぎだろ。

それぞれ好きなキャラクターを選んでから、俺はレジへと向かった。
「ってレジも混んで……………」

これまた会計に5分以上掛かりそうだ。

仕方ないので折角だから誰が何を買ったか見てみよう。

一葉は好きなキャラクターなのだろうか、ウッキーが片手を挙げて
にっこり正面で笑っている様が描かれているストラップ+ウッキー
の耳。

二葉はロナウドドッグとかいうやかましい鳴き声しか出さない青い
水兵さんみたいな服を着た白い犬が大口開けている絵が描かれてい
るストラップ+ウッキーの彼女のウキーちゃんのリボン。

三葉はブタのブーさんという橙色の毛並みに赤いシャツ、そして大
きく腹が出ていて、毎日八チミツが食べたいらしいキャラクターの
八チミツを素手で掬っている様が描かれたストラップ+同じくブー
さんの耳。

俺はチツポとドールという茶色いちっこいハムスターの兄弟が二葉
と三葉のように小突き合いをしている様子が描かれたストラップ。

俺は流石に耳は付けない。

閑話休題。

ようやく会計を終えて、一葉達はそれぞれ思い思いのキャラクターへと変身する。

「どうかこれ!?」

耳やらリボンやらを装着した3人はそれはそれは爆発的な可愛さだった。

「・・・か、可愛いと思うぞ・・・」

「へへへほんとかー!」

くっそ今ほど口下手な自分を呪いたくなる瞬間はない。

そんな俺の言葉でも、一葉はウツキーの耳に触れながらはにかみ、二葉はぴよんぴよんと跳びはね、三葉は頬を染めて微笑していた。

「ハルキも耳買えば良かったのに!」

「俺が付けたらすれ違い毎に引かれるぞ」

その言葉に一葉はしばし下唇に人差し指を当ててから、

「似合うと思うけどな・・・」

そんな事を呟いていた。どこ見てそう思ったんですかね。

「おっしゃ!んじゃそろそろアトラクション行くか!」

「お〜!どれ乗るどれ乗る!?!」

「全部乗りたいもんね〜。やっぱり近場から?」

「・・・」

エントランスで貰った地図を広げて、アトラクション一覧を眺める。

「えっと、まずここから近いのはスペースゾーンだな」

NSJは7つのゾーンに分かれており、それぞれの場所でアトラクションや外観、グッズや食べ物等が異なり、好みがかなり分かれる。他にウエスタンゾーン、トゥーンゾーン、ファンタジーゾーン、ウォーターゾーン、アドベンチャーゾーン、カントリーゾーンがある。

「初めて来たんだし、とりあえずはそこに行ってみよっか!」

「そだな〜。二葉と三葉もいいか?」

「お〜!この4人ならどこでもおっけーだ〜!」

三葉もひとつ頷いて、俺達はまずスペースゾーンに向かうことに決

めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4267z/>

クローバー（2）

2012年1月6日16時33分発行